




支え合いマップシリーズ

# 世話焼きさん と一緒に マップ作りも ご近所福祉も

住民流福祉総合研究所  
木原孝久



# はじめに

## (1)マップ作りは難しい？

「挑戦してみたけれど、やっぱりマップづくりは難しい」と言う人が少なくない。その理由を挙げてもらおうと…

- ①協力してくれる住民を探すのに苦労する
- ②プライバシーの問題がすぐに出てくる
- ③問題と解決のヒントが出てこない
- ④解決策が出て、活動がなかなか始まらない

## (2)世話焼きさんと手を組めばすべて解決

最近、これらの問題をすべて克服できる方法があることが分かった。ご近所に数名はいるはずの世話焼きさんと一緒にマップ作りをし、ご近所福祉をすすめるのだ。これで上記の難題はすべて克服できる！

## (3)マップとご近所福祉の基本は別冊子で

本書は上記テーマに絞ってあるので、マップ作りの基本やご近所福祉の進め方については、別の冊子（マップ作りについては「支え合いマップを使ってご近所福祉」を、ご近所福祉については「50世帯で地域福祉—ご近所福祉の発想」を）お読みいただきたい。

# <目次>

- <第1章> 本書のマップ作りの特徴… 4
- <第2章> 助け合いのカギを握る世話焼きさん… 8
- <第3章> 世話焼きさん主導で助け合いのご近所作り… 13
- <第4章> 世話焼きさんはどんな人？… 18
- <第5章> 世話焼きさんたちでマップ作り… 26
- <第6章> ご近所福祉の支援は超大型世話焼きさんの手で… 40
- <最終章> 「マップでご近所福祉」これだけで十分では？… 52

**<第2章>**

**本書の**

**マップ作りの特徴**

# 1. マップを作りやすい方法に特化

本冊子の狙いは、「マップを作りやすい」「マップを作った後にご近所福祉活動がすぐに始まるやり方」一に絞ってある。その基本は…

- ①各ご近所の意欲のある世話焼きさんと手を組む
- ②世話焼きさんの活動範囲をマップ作りの範囲に
- ③その世話焼きさんたちとマップ作り
- ④課題が出たら即、世話焼きさんたちで取り組む
- ⑤関係者は世話焼きさんのバックアップ役

## ①各ご近所の意欲のある世話焼きさんと手を組む

ご近所の世話焼きさんたち数名とマップ作りをする。その後の活動まで一緒に。世話焼きさんは日常的に問題探しをしているし、問題が見つければすぐに活動を始めるから、マップ作りの後にすぐに活動に入れる。

## ②世話焼きさんの活動範囲をマップ作りの範囲に

機械的に「50世帯」と区切るのではなく、世話焼きさんの活動範囲でマップ作りをする。それはご近所（50世帯）の一部かもしれないが、初めから50世帯全体をめざす必要はない。

## ③その世話焼きさんたちとマップ作り

その世話焼きさんたちと一緒にマップ作りをする。ご近所の各所から満遍なくとか、班長などの肩書のある人も加えるといった配慮はせず、とにかくご近所福祉に意欲のある世話焼きさんだけに集まってもらう。

## ④課題が出たら即、世話焼きさんたちで取り組む

マップで取り組み課題が出てきたら、すぐさまマップ作りに参加した世話焼きさんたちで活動に入ってもらう。そのご近所のすべての課題が出てから、などとは考えず、まず見つかった課題から取り組む。

## ⑤関係者は世話焼きさんのバックアップ役

民生委員や社会福祉協議会、町内会長などは、バックアップ役として参加し、できるだけ世話焼きさん主導で進める。

# 2.従来のマップ作りの難点は、世話焼きさんなら全て解決

マップ作りがうまくいかなかったり、なかなか活動に結びつかないのはなぜなのか。

- ①協力してくれる住民を探すのに苦労する
- ②プライバシーの問題がすぐ出てくる
- ③問題と解決のヒントが出てこない
- ④活動がなかなか始まらない

## ①協力してくれる住民を探すのに苦労する

困っている人を探し出し、助けてあげようと思う人は地域にそんなにたくさんはいないし、そういう人でないと、マップ作りに積極的に協力しようとは思わないだろう。その点、世話焼きさんを探し出してマップ作りをすれば、問題はなくなる。

## ②プライバシーの問題がすぐ出てくる

困っている人を本気で探し出そうとしている世話焼きさんにとっては、「プライバシー尊重」は障害でしかない。むしろプライバシーを乗り越えて、相手の問題を解決しようとするのが世話焼きさんなのだ。

## ③問題や解決のヒントが出てこない

世話焼きさんは日常的に問題を抱えている人を探そうとしているから、マップを作る時点で、既に見つけているはずだ。その問題の解決のヒントも同様。世話焼きさん自身が、既に行動を始めているはずだから、それがヒントになる。

## ④活動がなかなか始まらない

世話焼きさんは、問題を見つけたら、即刻行動に移す。だから、世話焼きさんとマップを作れば、こういう心配は初めからないのだ。

## <第2章>

# 助け合いのカギを握る

## 世話焼きさん

世話焼きさんは、助け合いのご近所を作るために、どのような役割を果たしているのか。



# 1.あなたのおつき合いの流儀は？

まず自分のおつき合いの流儀を確認するテストを。

以下の項目で、「私もそう思う」というものに○印を、「そうは思わない」に×印をつける。あなたは○がいくつになるか？

- ①自分や自分の家族のことは隠しておきたい
- ②自分のことがご近所で噂されるのはイヤ
- ③人に助けを求めるのは苦手だ
- ④人に迷惑をかけることだけは絶対にしたくない
- ⑤人のことはなるべく詮索せんさくしないようにしている
- ⑥誰かが認知症だと気づいても、誰にも言わない
- ⑦困っている人にはお節介と言われないう程度に関わる
- ⑧引きこもるのにも事情があるから無理にこじあけるな
- ⑨お互いのプライバシーは十分に尊重し合うべきだ
- ⑩隣人とは深入りせずほどほどのおつき合いを心がける

## 2.おつき合いの常識人は助け合いはできない

多くの人は、10個のうち7つから9つに○が付く。それもそのはず、これらは日本人のおつき合いの常識なのだから。ただし常識人、つまり○印が多い人は、「助け合いはしたくない」と言っているのと同じなのだ。なぜそうなるのか。

### (1)要するに「放っておいてくれ」

- ①自分や自分の家族のことは隠しておきたい

→それでは困り事が周りに気づかれない

②自分のことがご近所で噂されるのはイヤ

→それでは困り事の情報に周りに伝わらない

③人に助けを求めるのは苦手だ

→頼まれたら助けるのが日本人。これでは手が出せない

④人に迷惑をかけることだけは絶対にしたくない

→迷惑かけたくないと思えば「助けて」と言えなくなる

## (2)要するに「放っておこう」

⑤人のことはなるべく詮索しないようにしている

→詮索するほどの積極性がないと人の困り事は見えない。

⑥誰かが認知症と気付いても、誰にも言わないようにしている

→それでは困り事の情報に周りに伝わらない。

⑦困っている人には、お節介と言われぬ程度に関わる

→そんなに消極的な姿勢では、人は助けられない。

⑧引きこもる人を無理にこじあけるべきではない

→だから、孤立死が生まれるのだ。

## (3)「助け合いをしないご近所に」

⑨お互いのプライバシーは十分に尊重し合うべきだ

→つまり「あなたを助けようとはしない」ということ

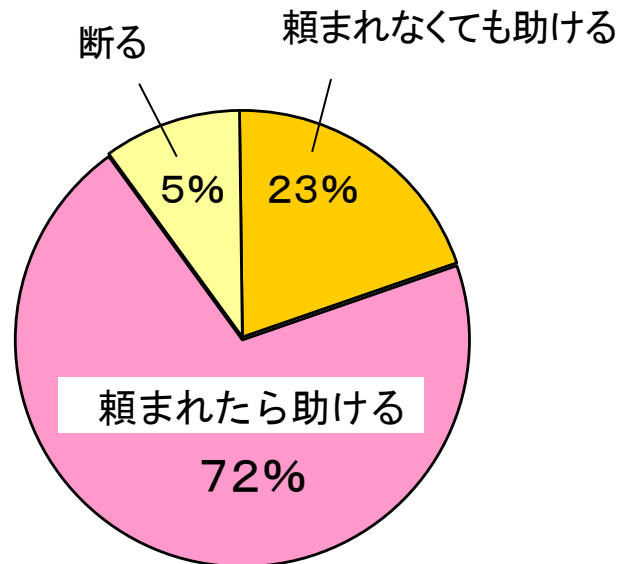
⑩隣人とは深入りせず、程ほどのおつき合いを心掛ける

→困り事は言い合わない、助け合いをしないご近所関係

# 3.足元に困っている人がいたら？

「あなたは足元に困っている人がいたら、どうしますか？」の質問に、以下のよ  
うな回答が寄せられた。

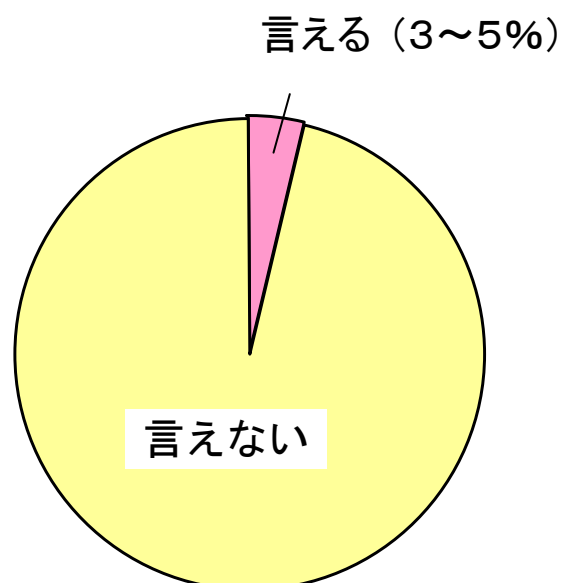
「頼まれなくても助ける」が23%。また「頼まれたら助ける」が72%。これらを合わせて、95%が「(困った人がいたら) 助ける」と言っているのに、なぜ助け合いが始まらないのか？



## 4. 困ったら「助けて」と言える？

一方で、「もし困ったことがあれば、周りに助けを求めることができるか？」と尋ねると、「助けて！」と言える人は、わずかに3~5%。

となると「頼まれたら助ける」という人(72%)は、動きようがない。誰も頼まないのだから。



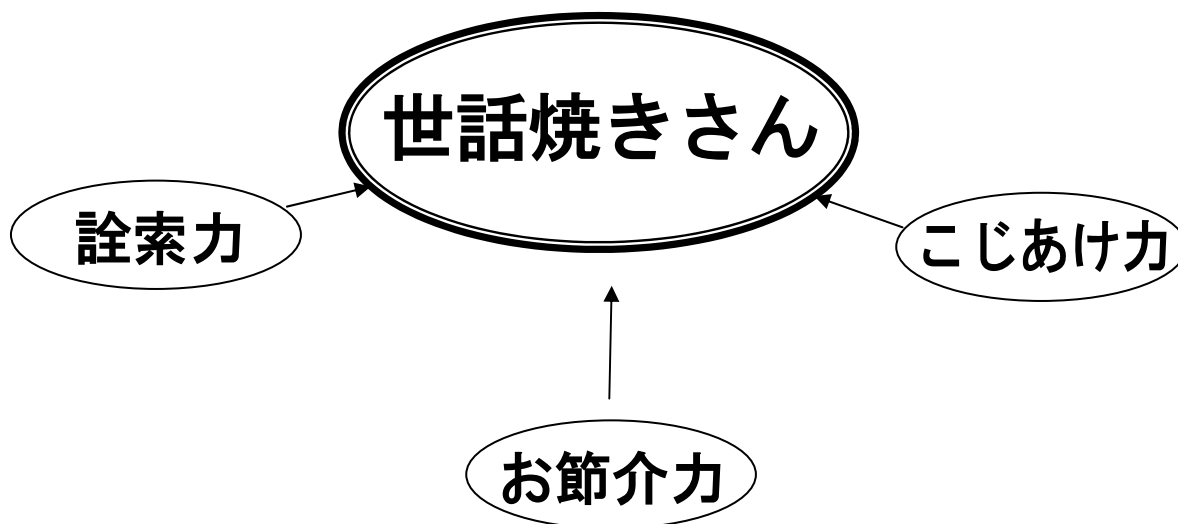
## 5.助け合いが始まるためには

これまで述べたことを整理すると、こうなる。

- ①調査の結果、受け手である人の大半が、「助けて」と言えないことがわかった。
- ②ならば、担い手が遠慮せず、以下の3つを実践する必要がある。世話焼きさんは多かれ少なかれ、この3つの資質を兼ね備えている。

- ①詮索しよう！
- ②お節介をしよう！
- ③こじあげよう！

- ③3つの力を兼ね備えた世話焼きさんを先頭に、“攻撃的助け合い”を仕掛けよう。



## <第3章>

# 世話焼きさん主導で 助け合いのご近所作り

# 1.地域は3つの圏域からできている？

一般に、地域は下のように3つの圏域からできていると言われる。第1層が市町村で、数万世帯。第2層が校区で、数千世帯。そして第3層が自治区で、数百世帯（町内会のある圏域）。



## 2.福祉関係者は第1層から号令を発している —トップダウン方式だ

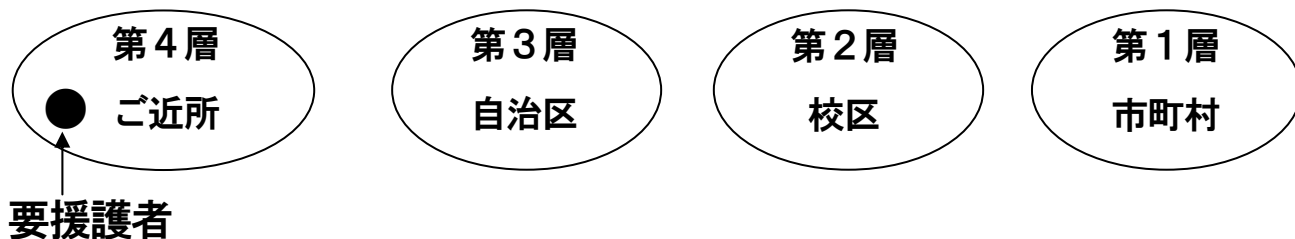
福祉関係者は第1層の福祉センターを拠点に、ニーズを推測し、サービスをつくり、担い手を養成し、要援護者に「困り事があれば福祉センターへ」と言っている。—「推進者主導」の福祉である。

そこでの悩みは—「ニーズが分からない」「担い手が集まらない」「要援護者がやって来ない」。なぜか？

## 3.要援護者は3つの圏域(層)にはいない —彼らは第4層にいた！

今の地域福祉では認識されていないが、地域には4つ目の層があった。長年、全国でマップづくりをする中で、住民はおおよそ50世帯でふれあい、助け合っ

いることが明らかになった。私共はここを「ご近所」と呼んでいる。昔の日本で国郡里という圏域設定がされていたが、その中の「里」も50世帯だった。



## 4. 助け合いができるのは唯一、ご近所だけだった

人々は50世帯が「顔が見える」範囲と見ていた。だから、ここなら助け合いができるのだ。4つの層の中で「ご近所」が唯一、助け合いができる圏域だった。

## 5. 関係者が存在を認識していない「ご近所」に要援護者がいた。どおりで「ニーズが見えない」はずだ。

要援護者はその心身の状況から、ご近所の外に出るのが困難だ。そこで足元の人たちの支援を受けながら、ご近所の中で自立生活をしている。だからご近所を最高の福祉の場にしてほしいと願っている。

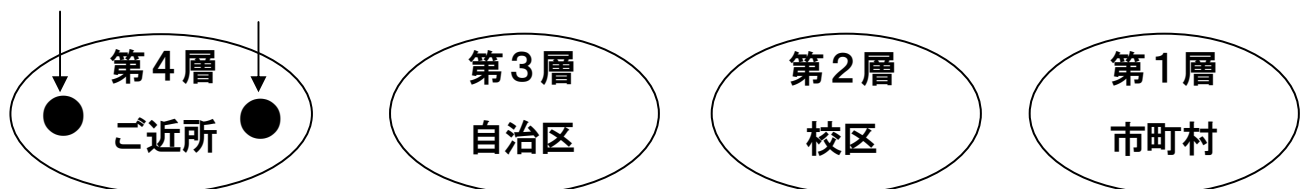


要援護者は足元の人たちにいろいろ支援を求めている。その範囲は極めて狭いことがわかる。

## 6.ご近所に大小世話焼きさんもいた

地域で要援護者のお世話をしている世話焼きさんは、顔の見えない第3層以上では活動できないので、主にご近所で活躍している。意外や、ご近所は大中小の世話焼きさんが活動する、人材の宝庫なのだ。

要援護者 世話焼きさん





## 7.要援護者を第一に考えるなら、まず助け合いのご近所を作るべきだ。

今の推進者主導の福祉では、要援護者から最も遠い第1層を拠点にして、そこからニーズを推測しようとしている。そして作ったサービスを、要援護者が第1層まで受け取りに来ることを求めている。要援護者主導からかけ離れたやり方ではないか。対するご近所福祉は、要援護者主導の福祉のシンボルだと言える。

## <第4章>

# 世話焼きさんは どんな人？

# 1.あなたの「世話焼き」度は？

以下の項目で該当するものが多い人は、世話焼きさんだといえる。

- ①いつも「困っている人はいないか」と周りを見ている
- ②困っている人がいたら、気になって仕方がない
- ③困っている人を見つけたら、即刻その人に関わろうとする
- ④相手に頼まれなくても積極的に関わってしまう
- ⑤だれもが私を頼って、助けを求めにくる
- ⑥人間は誰でも好き。私には嫌いな人がいない
- ⑦目立たずに人を助けるのが私の流儀だ
- ⑧役を持たされるのは苦手だ。陰で動いていたい
- ⑨相手の困り事がよく見える
- ⑩私自身、助けられ上手でもある

## 2.世話焼きさんはこんな人

地域で活躍している世話焼きさんは、どんな資質を持っているのか。

### ①「困った人がいると、気になって食べ物が喉を通らない」

都内で「世話焼きシンポジウム」を開いた時、パネリストの3人に聞いてみた。「困っている人を見つけると、どうなるのか？」と。そのとき3人が一致して言ったのが、「その人に関わるまで、気になって食べ物が喉を通らない」だった。

### ②即座に動き出す

ある時マップ作りをしていて、世話焼きさんがマークしていなかった要援護者が見つかった。その世話焼きさんは、マップ作りが終わるやいなや、「今からこの人の家に行ってみる」と言って立ち上がった。

### ③要援護者に見込まれる

前項のように即刻動いてくれるから、要援護者はその人に頼もうとするわけだ。

### ④嫌いな人がいない

もともと人の好き嫌いが無いと言う。または、好き嫌いで人を判断しない。だから、誰でも助けてしまう。

### ⑤世話焼きと世話役は違う

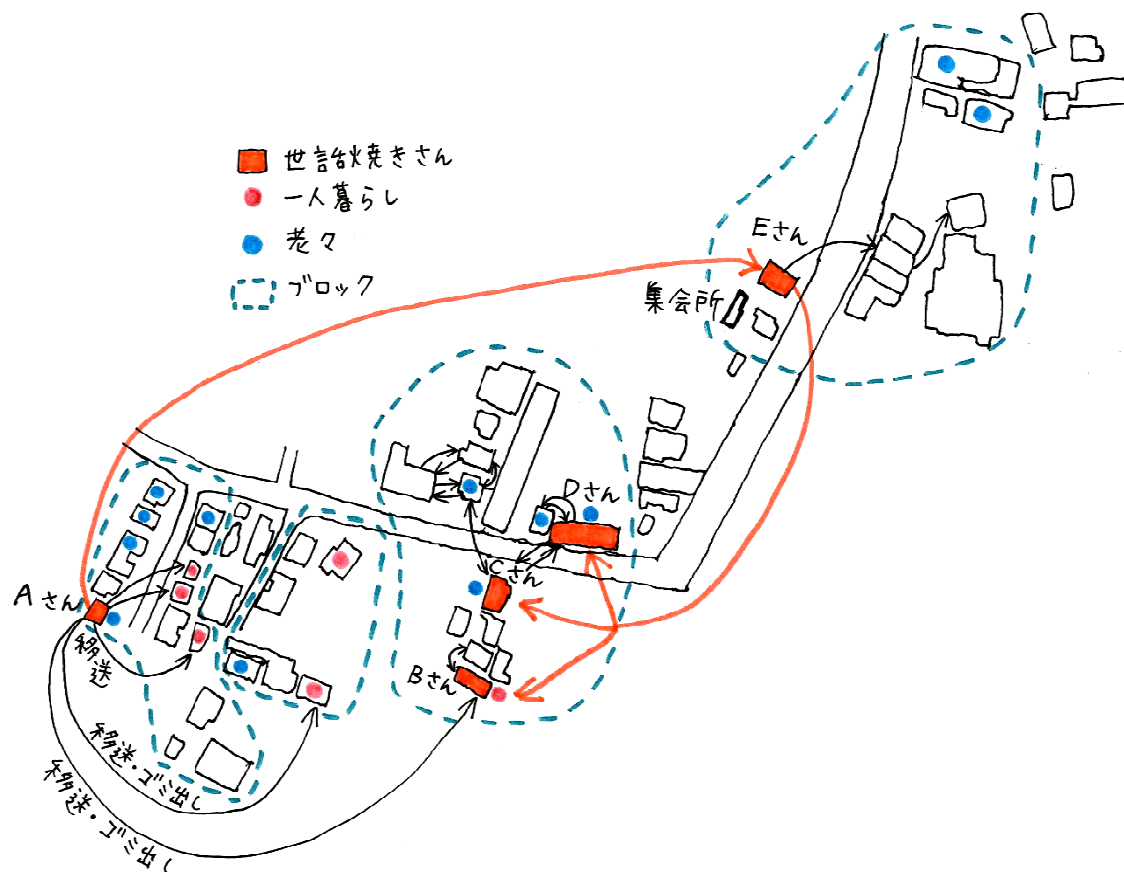
「世話焼き」さんは、人の面倒を見るのが好きな人。役は持ちたがらない。

### ⑥天性の資質で、養成には馴染まない

世話焼きさんに聞くと、だれもが、その資質は親や祖父母から受け継いだものだと言う。

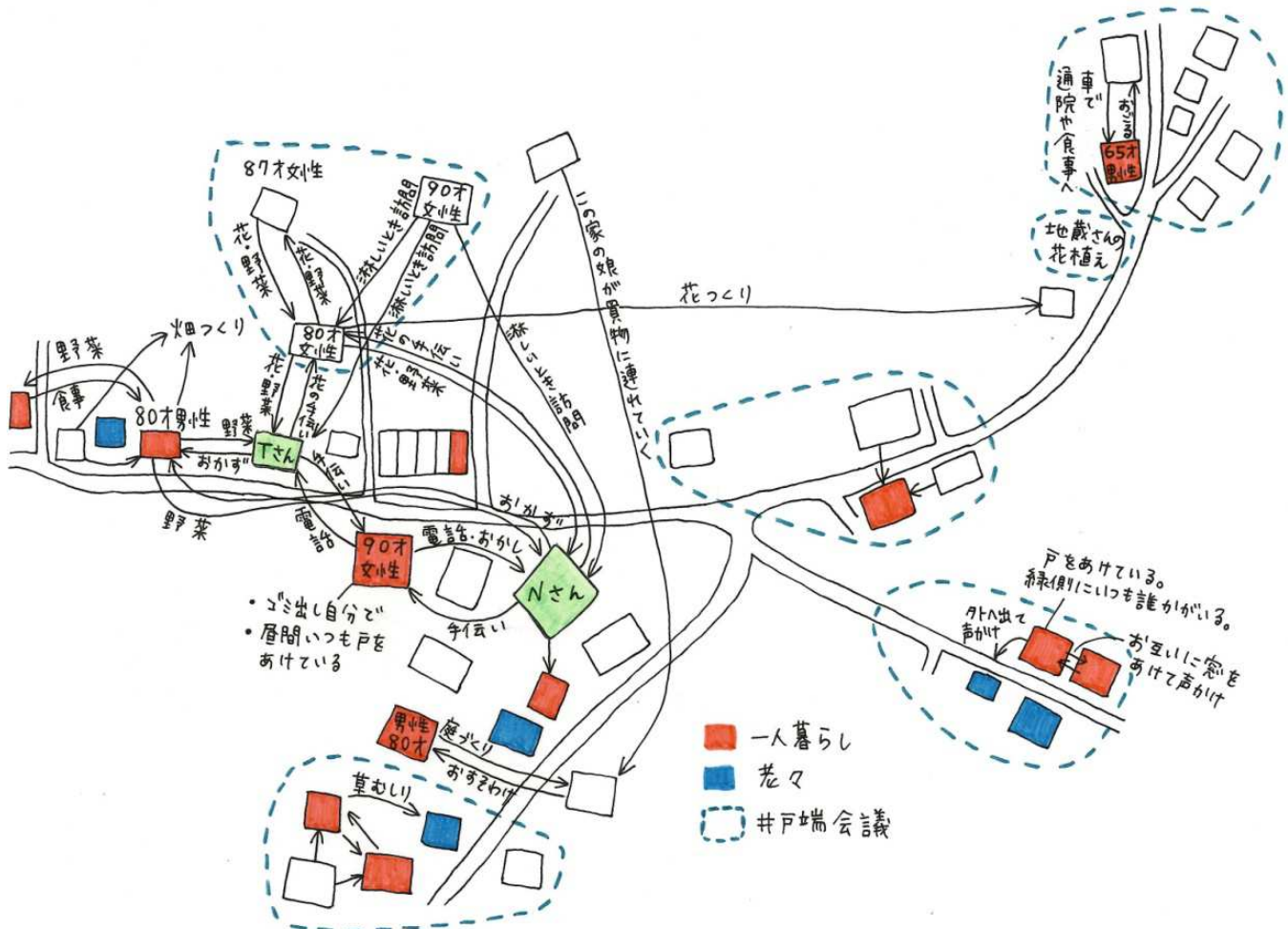
### 3.世話焼きさん同士がネットワーク

下のマップでは、大型世話焼きさん(左下のAさん)と中型世話焼きさん (BCDE) がネットワークしている。Aさんが日々、BCDEの人たちを巡回して「何かあったかい?」と聞いていた。Aさん自身、足元の人たちの面倒をみている。



### 4.世話焼きさんはご近所の助け合いの動向をよく知っている

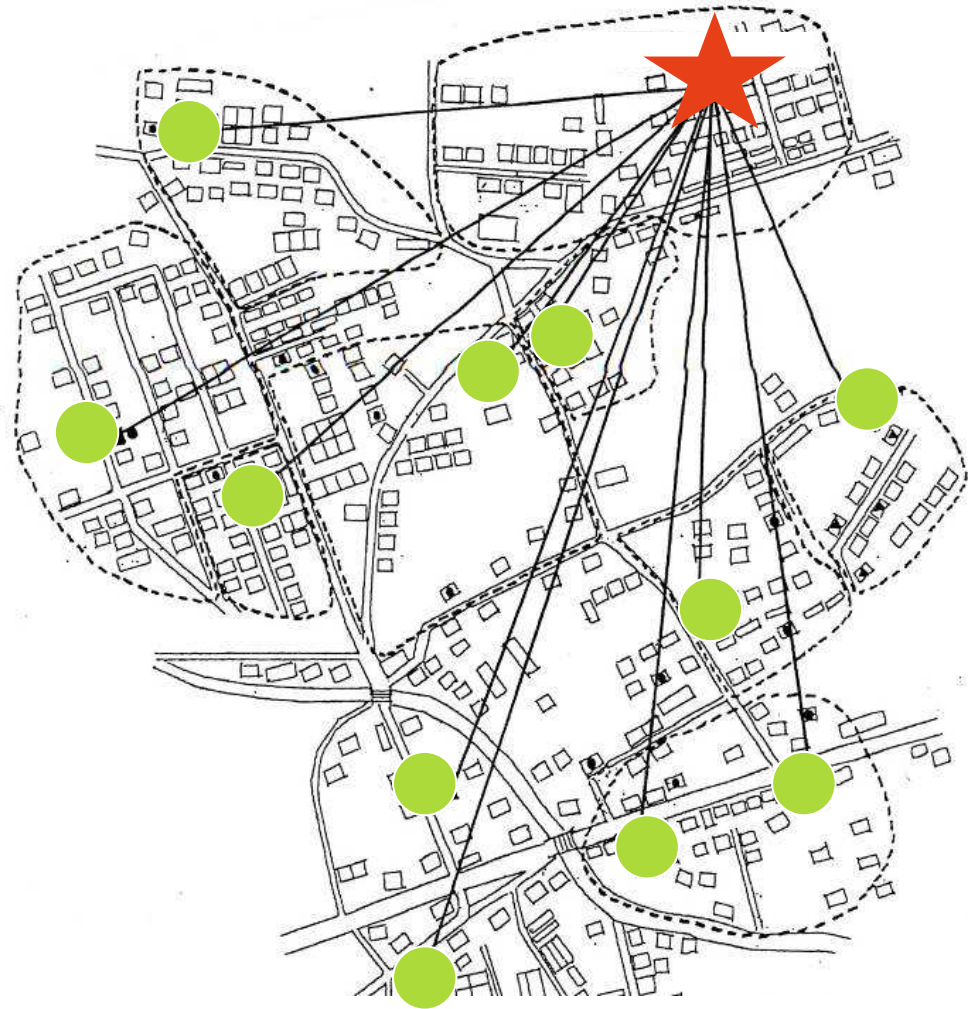
一つのご近所で人々がどのようにふれあい、助け合っているかを調べたら、次のような事実が出てきた。これらはすべて、2人の世話焼きさん(緑色のTさんとNさん)から得られた情報である。いかに地域をよく見ているかがわかる。



## 5. 超大型世話焼きさんは仕掛人

一般に大中小の世話焼きさんは、ご近所内の、自分の足元の要援護者に関わっているが、ネットワークしたり、仕掛け人的な活動はしない。しかし、中には第3層以上の圏域で活躍している超大型世話焼きさんもいる。

次のマップでは、超大型世話焼きさん（★印）が、各ご近所にご近所内のニーズが見える人（●印）をアンテナ役として確保し、ニーズを見つけたら連絡するよう指示している。そしてそのニーズに彼女が関われない場合は、ご近所内の世話焼きさんに関わりを指示する。



## 6.世話焼きさんをどうやって探すのか？

- ① 1人見つけたら、その人に聞く
- ② 世話焼きさんは足元の人を世話している
- ③ 多くはご近所で活躍している
- ④ 超大型世話焼きさんは第1、第2、第3層にいる
- ⑤ 民生委員は大概知っている
- ⑥ 日常的にご近所を歩いている人ならわかる
- ⑦ 世話役と間違えやすいのでご用心
- ⑧ マップを作れば確実に見えてくる

## ①1人見つけたら、その人に聞く

ご近所内の世話焼きさん同士はなんとなくつながっているらしい。互いに狭いご近所内の情報を収集しているから、目に入らないはずはない。そして場合によっては、柔らかなネットを組んでいる。

## ②世話焼きさんは足元の人を世話している

大型世話焼きさんでも、自分の足元の人たちの面倒をみている場合が多い。そういう視点で見れば、複数の要援護者に関わりの手が入っている範囲には世話焼きさんがいると見ていいのだ。

## ③多くはご近所で活躍している

大中小の世話焼きさんたちはほとんど、ご近所内で活躍している。第3層以上では広すぎて、関わりの対象が見えにくい。

## ④超大型世話焼きさんは第1、第2、第3層にいる

超大型世話焼きさんだけは、第3層以上で活躍している。しかも他の人を動かし、活用することができるので、既に何らかのグループのリーダーシップをとっていたり、関係機関の長であったりする。探し方を工夫しないと見えにくい。

## ⑤民生委員は大概知っている

民生委員は、世話焼きさんからご近所の情報を得ることができるので、数名は確保している民生委員が多い。しかも関わりの対象を通して、世話焼きさんの存在を知っている。

## ⑥日常のご近所を歩いている人ならわかる

いずれにしても、普段から日常のご近所を歩き回っている人でないと、ご近所のことは分からないし、世話焼きさんも発見できない。第1層だけで活動して



いる人だと、世話焼きさんの存在自体、認識していないのではないか。

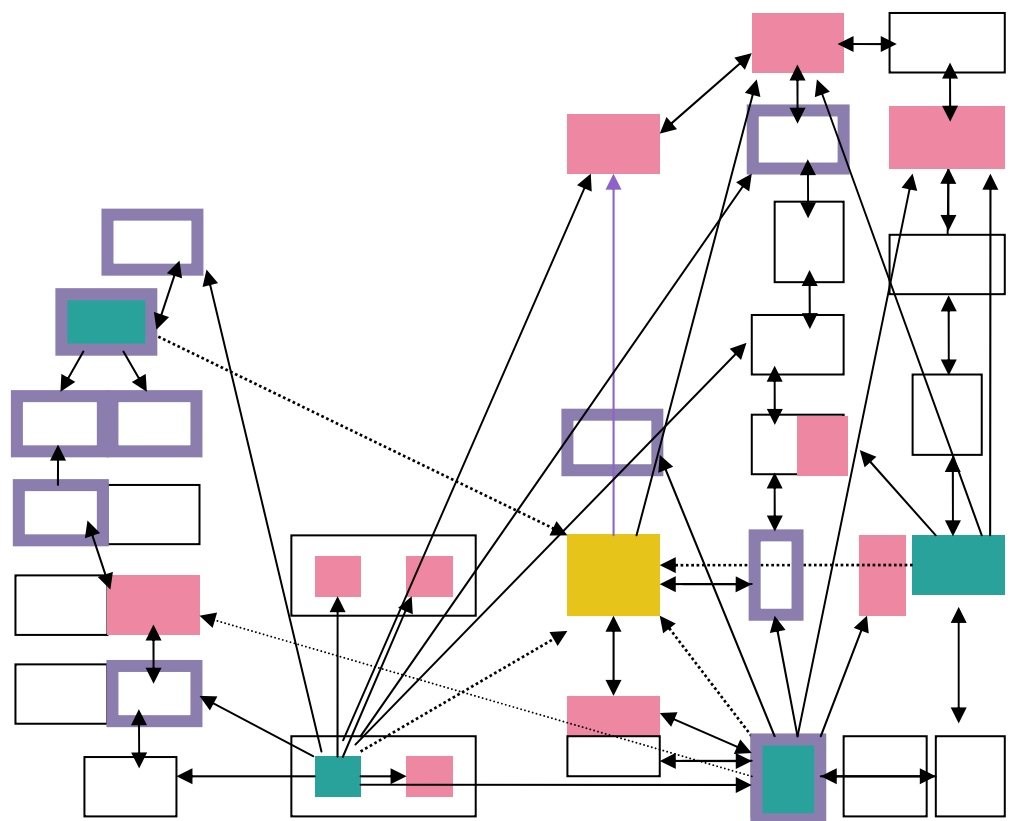
## ⑦世話役と間違えやすいのでご用心

一般住民だけでなく福祉関係者でも、「世話焼き」と「世話役」を混同している人が少なくないが、これを間違えてしまうとご近所福祉はできない。「世話焼き」さんは困っている人の面倒を見る人で、「世話役」と言われる人は何らかの組織で役を持っている人だ。

## ⑧マップを作れば確実に見えてくる

とにかく一度支え合いマップを作れば、世話焼きさんの存在が浮かび上がってくる。次のマップでは、最下段の2人（緑色）が大型世話焼きさんで、それぞれが10名程の面倒を見ている。中段の左右の2人が中型で、それぞれ5名程度の面倒を見ている。その他の人

（■にはしていないが1人～2人に関わっている人）が小型の世話焼きさんだ。



- …高齢者世帯
- …高齢者一人暮らし
- …民生委員
- …世話焼きさん

## <第5章>

# 世話焼きさんたちで マップ作り

# 1.助け合いのご近所を作るには、まず助け合いの実態を知らねば…

住民は既に助け合いをしている。それを明らかにして生かせば効率的だ。



# 2.ご近所の助け合いは見えにくい。住民は水面下で動いている。そこでマップの出番

ご近所流の助け合いというものがある。詳しくは「ご近所福祉」の冊子で説明しているが、その中に、住民は水面下で助け合っているという事実がある。助け合いはミエミエでやるものではないというのだ。

だから、もともとご近所さんたちの助け合いは、表面からは見えないようになっている。ではどうしたらいいのか。

そこで考案したのが支え合いマップ作りだ。どうしてマップを作れば見えてくるのか。50世帯の中に住んでいる住民、5名ほどが集まって住宅地図を囲み、各自の足元のふれあいや助け合いの関係を線で結んでいく。そこでたとえば、

**10本程度の線が出ている人がいれば、大型世話焼きさんだ**と分かってくるのだ。

### 3.まず「ご近所」を特定

50世帯のご近所といっても、どこからどこまでを区切ったらいいのか。いくつかの「目安」がある。

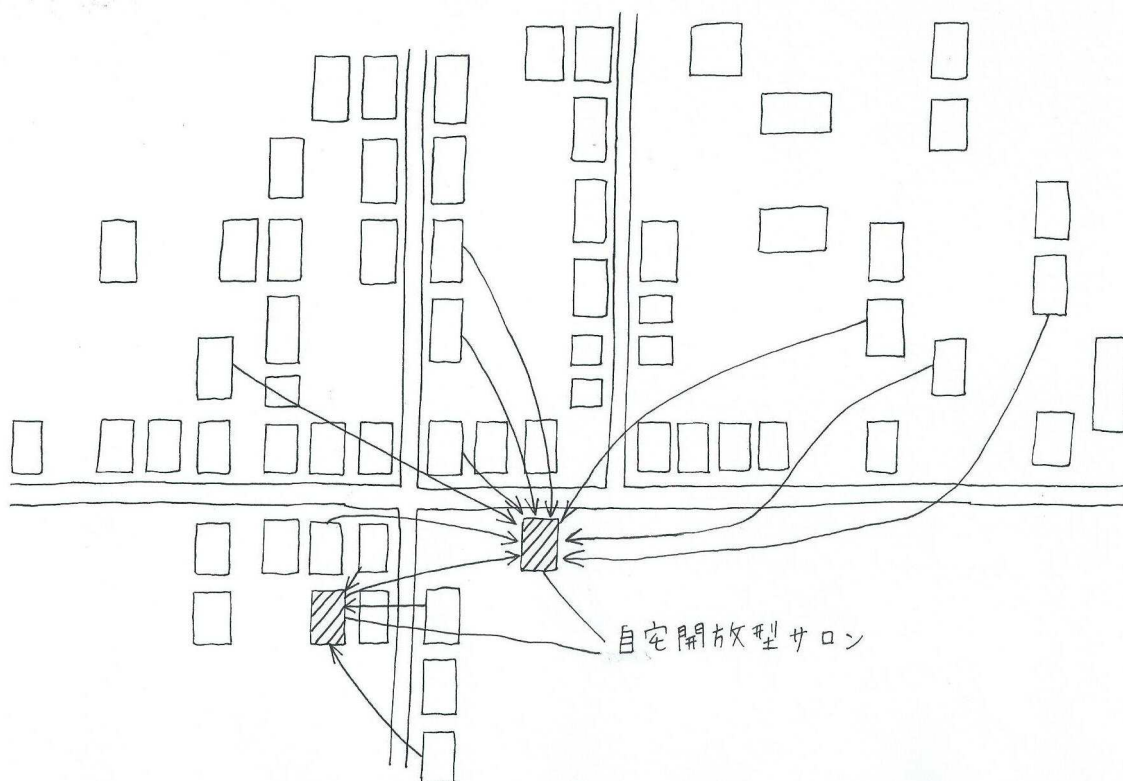
- ①自治区（町内）がたまたま50世帯の地区では、その町内を「ご近所」と見ればいい
- ②数百世帯の自治区で、複数班がまとまっている範囲
- ③そのご近所の大型世話焼きさんの活動範囲
- ④ご近所の世話焼きさんたちがネットを張っている範囲
- ⑤マップ作りに参加した世話焼きさんたちの活動範囲

#### ①自治区（町内）がたまたま50世帯の地区では、その町内を「ご近所」と見ればいい

全国各地でマップを作っていて発見したのがこういう地区である。圏域で言えば第3層に当たるから、そこに町内会がある。ならば数百世帯になるはずが、じつは50世帯程度だった。

1つの町内だから、まとまっている。助け合いはやり易い。ふれあいサロンなどは大抵は数百世帯の町内で開かれるから、参加者も数百世帯に広がっているが、ここでは50世帯の中に分布している。

次のマップは、50世帯の町内。ふれあいサロンが2カ所で開かれていて、当たり前なことだが、参加者は50世帯の中から集まっている。普通は数百世帯の町内で開かれ、数百世帯から集まってきているから、普段は顔を合わせない人も多く、絆が強まりにくい。



## ② 数百世帯の自治区で、複数班がまとまっている範囲

よくある数百世帯の自治区の中に、複数の班があるが、例えばその中の1班と2班が昔から仲が良くて、人々の往来も頻繁だという場合がある。そのようなケースでは、ここを「ご近所」の一部と考えてもいい。

その場合も、やはりポイントは、その中の世話焼きさんがどのような活動をしているかを調べ、その活動を中心にマップ作りの範囲を決めることだ。

## ③ ご近所の1人の大型世話焼きさんの活動範囲（シマ）

ご近所内に1人の大型世話焼きさんがいれば、10人程度の人に関わっているから、その周りの人も含めて、15～20世帯の範囲を囲い込んでみると、そこもマップ作りの範囲とすることができる。これを「ご近所」とするのではなく、ご近所の一部と考えてマップ作りをするのだ。

**初めからご近所の全体を把握しなければならないということではなく、まず、その中の一部だけでも切り取ってマップ作りをするのもいい。** いずれはご近所の全体が把握できるはずだ。

#### **④ご近所の世話焼きさんたちがネットを張っている範囲**

1人の大型世話焼きさんだけでなく、他の中小の世話焼きもネットを張っていることがわかれば、そのネットの全体をマップ作りの範囲としてもいい。

#### **⑤マップ作りに参加した世話焼きさんたちの行動範囲**

たまたまマップ作りに参加した世話焼きたちの住んでいる範囲をマップ作りの範囲としてもいいのではないか。そこで出てきた取り組み課題に、まずその世話焼きさんたちで取り組み始めればいい。

## **4.ご近所の世話焼きさん数名でマップ作り —なぜ「世話焼き」にこだわるのか**

マップ作りの目的は、ご近所福祉づくりである。そのご近所福祉を実行する世話焼きさんたちが、マップで出てきた課題を実行するのだから、その人たちが主役となってマップを作るのが当然と言える。

## **5.マップ作りは2回。1回目にご近所の概要を把握。2回目に当面実行するテーマを絞り込み、実行の作戦を練る。**

実際に世話焼きさんたちでマップを作り、出てきた課題に取り組んでいる事例を調べると、2回に分けてマップ作りをしていた。

1回目にご近所の概要を把握。2回目に当面実行するテーマを絞り込み、実行の作戦を練るというものだ。

## 6.世話焼きさんが1人か2人でもマップ作りを。 ご近所全体を把握する必要はない。

ご近所全体は把握できなくても、特定部分からご近所づくりを始めるのでいい。その後のマップ作りで、他の世話焼きさんが見つければ、その人と別の部分を掘り進めればいい。

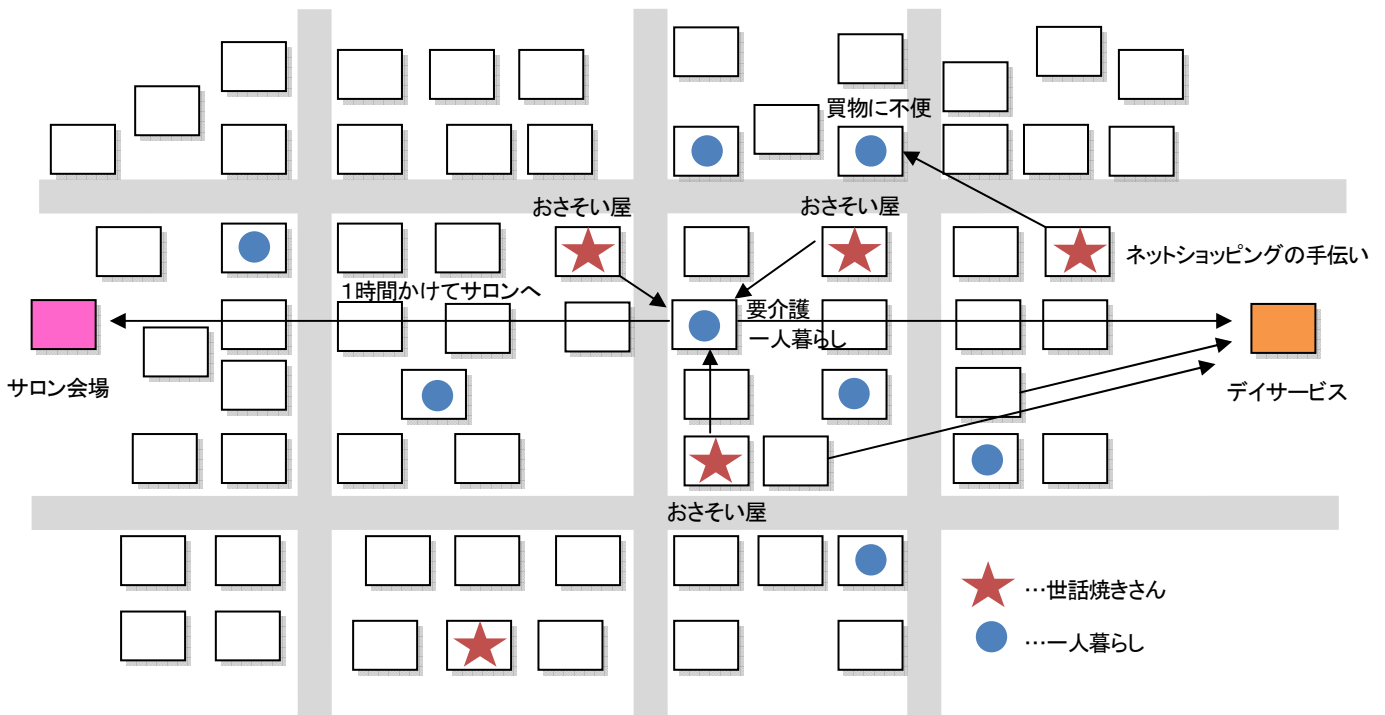
極端に言えば、取り組みテーマが1つ見つければ、まずそれに手を付ける。その活動の中で、新しいテーマが見つかるはずだ。

### [事例・あるご近所でのマップ作り]

次の一連のマップを見ていただきたい。とりあえず1人の世話焼きさんとマップを作ってみて、以下の結果が出た。

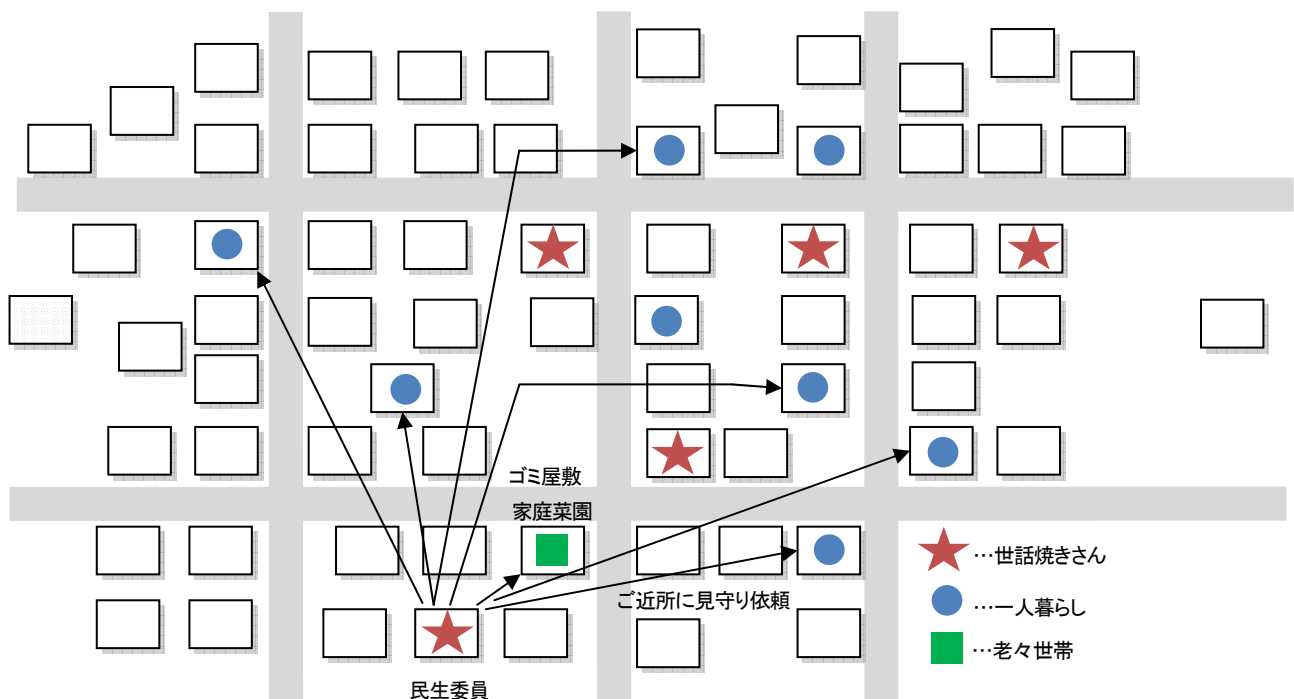
ここでは、デイサービスを利用している人を調べたら、3人いた。その中の1人が、要介護で一人暮らしの人だった。この人がふれあいサロンにも参加していた。理由を尋ねたら、「誘ってくれる人がいたから」。確かに3人がお誘いしていた。ならば、他の2人も、うまく誘えば参加するかもしれない。お誘い活動を広げよう。これが第1回目のマップ作りから出てきた活動テーマ。

もう1つ。一人暮らしの高齢者の中で、車がないから買い物が不便という人が見つかった。そこで聴取者が、最近、ネットショッピングが広がっているという話をしたら、ある世話焼きさんから、「じつは私、この人のためにネットショッピングをしてあげている」という話が出た。ならば、ネットショッピングの活動を広げよう。今の若い人たちはネットショッピングを利用しているはずだから、この際、一人暮らし高齢者のボランティアとしてこれを実行してもらったらどうかとなった。このご近所では当面、この2つに取り組んでみればいい。



第2回目のマップ作りでは、世話焼きの民生委員がご近所全体を把握して、気になる人を探し出し、そのご近所さんに見守り等を依頼しているという話が出た。ゴミ屋敷の家があって、これにも彼は関わっていた。

これだけのことを1人に委ねるのはよくない。**ご近所で彼の活動をサポートする**必要がある。これが2回目のマップ作りで出てきた取り組みテーマだ

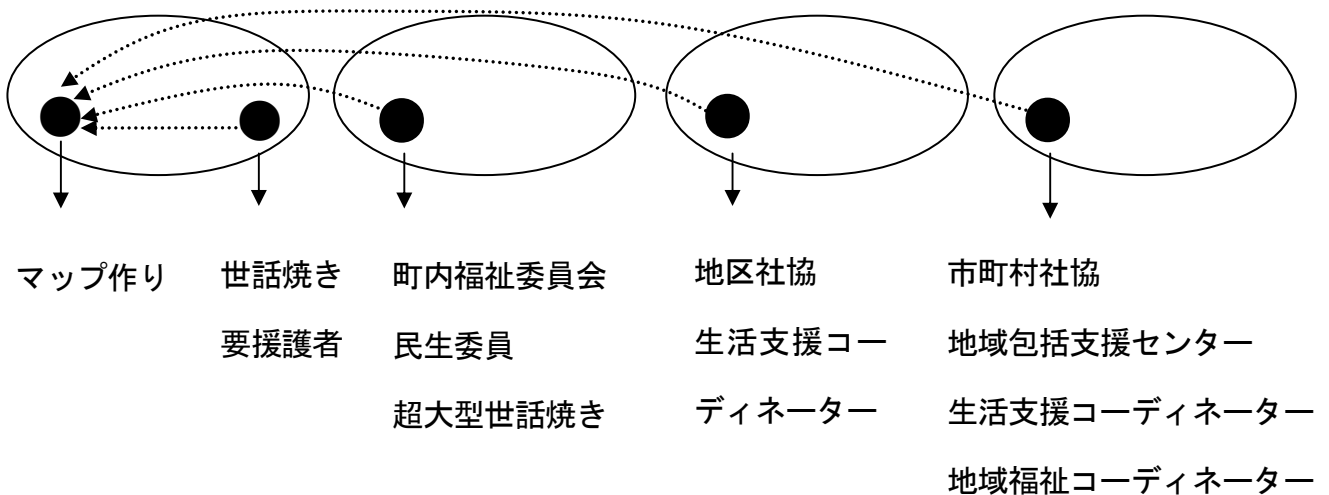




## 7.ご近所でのマップ作りに関係者が結集しよう

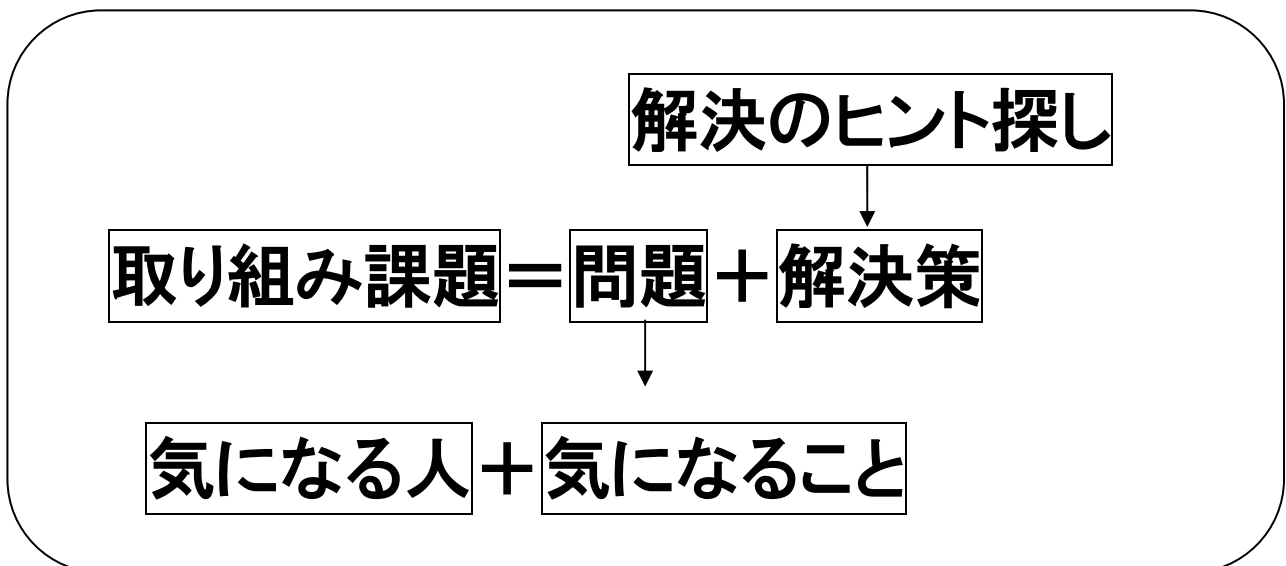
関係者は第一層で福祉ニーズを把握しようとするが、本来ニーズ把握は当事者のいるご近所でやるべきである。最も良いのはマップ作りに参加することだ。

マップ作りの中で課題がでてきた時、それぞれの層の役割が見えてくる。それを担当すればいい。しかしあくまで福祉の実践現場はご近所である。課題を各層に持ち出してはならない。



## 8.マップの目的は取り組み課題探し

これについてはマップ作りの入門書で詳しく扱っているが、一言で示せば以下の通り。



## 9.世話焼きさんには得意なことばかり

一般住民には、これらは難題だ。気になる人・ことを聞いても、あまり出てこない。解決のヒント探しはもっと難しい。

しかし世話焼きさんは、日常的に気になる人・ことを探しているから、すでに頭の中にある。それに世話焼きさん自身も一部関わっているから、その行為自体が解決のヒントになる。

## 10.実際に世話焼きさんたちでマップ作りをしたら… ＜取り組み課題の抽出例＞

以下のような取り組み課題が出てきた。解決のヒントも出てきている。わずか50世帯のご近所にこんなに問題があった。

## ■気になること

(1)店まで行くのに坂道で休憩しないと行けない。

### <解決のヒント>

- ①買い物の途中に、世話焼きさんが自宅に招き入れ、休憩させていた。
- ②雨や雪の日は、車で送ってあげているようだ。
- ③気心が知れた同士は、遠方まで乗せている人も。

### <解決策>

- ①車のない人のために「移送屋」を確保しよう。

(2)一人暮らし男性で、コンビニ弁当ばかり、健康面が心配。

### <解決のヒント>

- ①ご近所に食生活改善推進員のリーダーもいるので、活用したら？
- ②一人暮らし男性で草刈りをしてくれているので、お礼が必要だ。

### <解決策>

- ①彼らへのお礼として、おかずの差し入れをすることから始めよう。

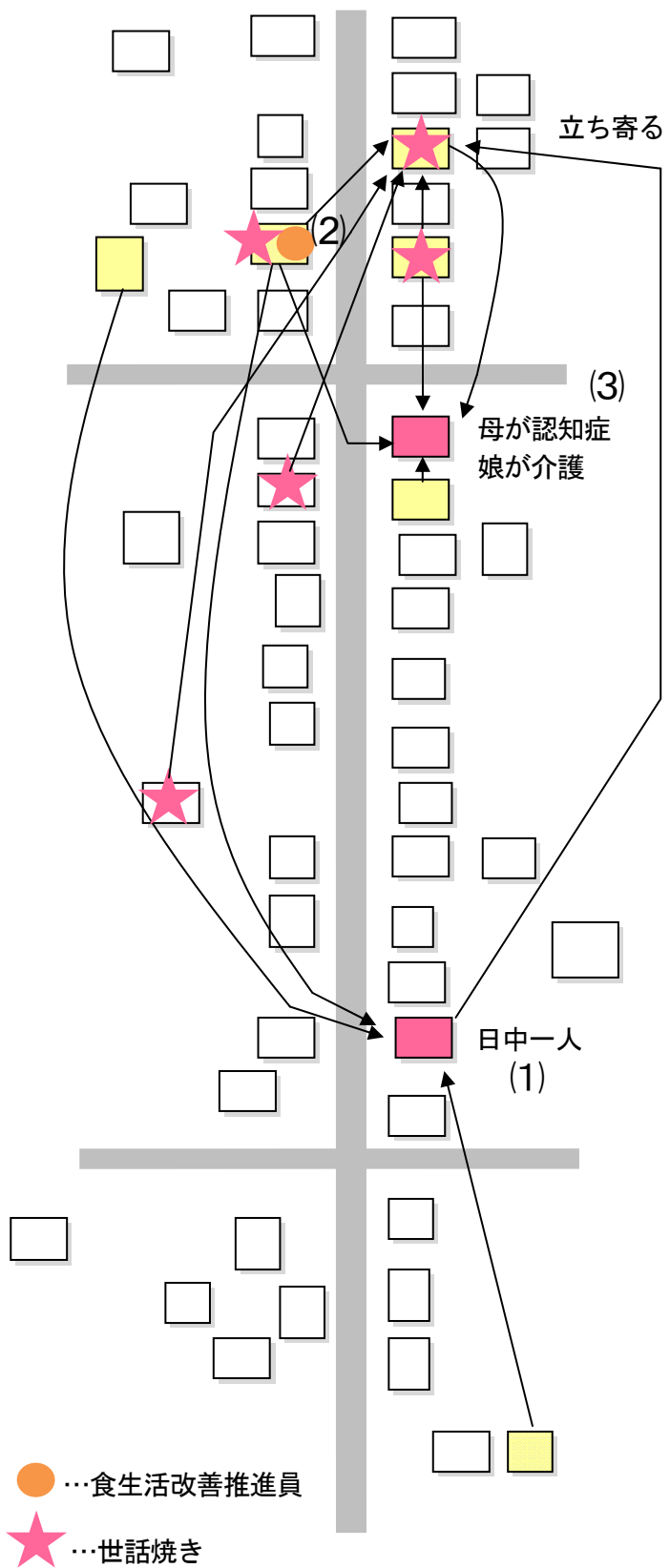
(3)認知症の母を娘2人で介護。窓に目張りをしている。

### <解決のヒント>

- ①ご近所では、娘と戸外で出会った時は声をかけている。
- ②母は以前、踊りのお師匠さんだった。

### <解決策>

- ①教え子たちの指導役として願います。



#### **(4)誰でも参加できる集まりがない。**

##### **<解決のヒント>**

①一人暮らし高齢者たちが井戸端会議を開いているが、誰でも気軽に集まれる場がない。

②あまり使われていないが、町の集会所があった。

##### **<解決策>**

集会所でサロンを開催したらどうか。

#### **(5)一人暮らしの男性が行事に参加していない。**

##### **<解決のヒント>**

①以前、この地区では麻雀が盛んだった。

②多人数でできるコミュニケーション麻雀もあるそう。

③川柳が得意な人もいる。

##### **<解決策>**

①麻雀を復活させよう。多人数でできるコミュニケーション麻雀も。

②川柳を集会所に貼ったり、教えてもらったりするのもいい。

#### **(6)ご近所内をウロウロし、出会った人に声掛けする男性。**

##### **<解決のヒント>**

①誰かとお話したいのかも。

##### **<解決策>**

①この人も新しく誕生するサロンに入れてあげるか…

#### **(7)寝たきりで一人暮らしの男性**

##### **<解決のヒント>**

①ヘルパー訪問時に戸が開くので、周りで様子を見ている。

②いざという場合は近隣で運び出す相談はしている。

③避難所はすぐ近くにある。

### <解決策>

①ケアマネ、ヘルパー、施設、民生委員、町内会等で個別ケース会議。災害時に誰がどうやって避難支援するのかを協議。

②川沿いの一人暮らし高齢者のための緊急時お助け隊を結成。車を持っている人にも協力を求める。

③避難所の「お世話隊」。ご近所在住の元保健師、看護師、介護職を動員。

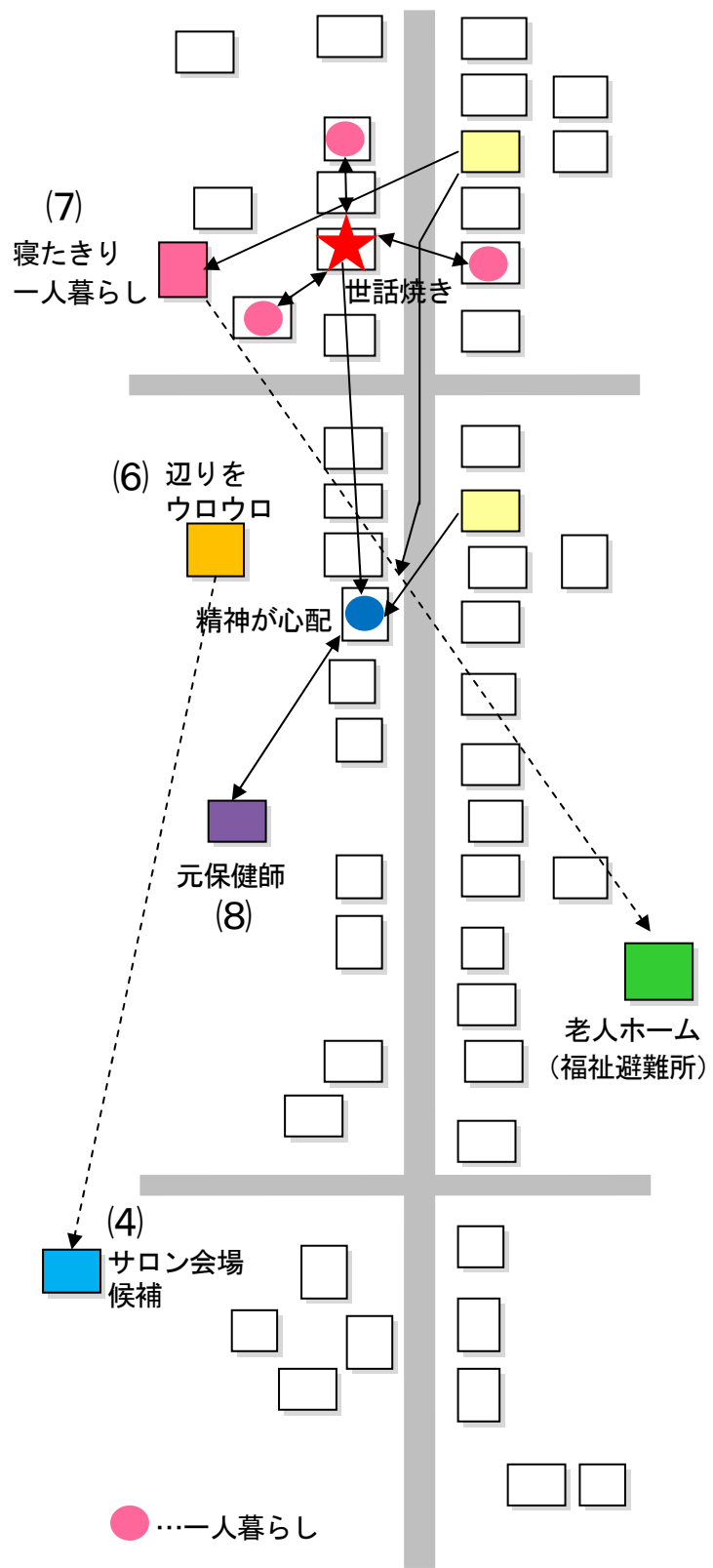
## (8)精神障害が心配な一人暮らしの男性

### <解決のヒント>

①近くの元保健師が相談に乗っていた。

### <解決策>

①元保健師を中心に精神の人たちの見守り体制作り。



# 11.世話焼きさんたちの手でマップ作りの効果

## ①時代を反映した諸問題がひとつおとり出てきている

たった50世帯のご近所だから、問題はそんなにないと思われるが、時代を反映した諸問題がひとつおとり出てきているのに驚かされる。

## ②上層では期待されるほど問題は出てこない

町内でマップ作りをすると、ご近所が5つから10個まとまっているのだから、出てくる問題もそれに相当した数だと思われるのに、現実にはそれほどでもない。町内という広い圏域になると、お互いの顔が見えなくなり、誰が何をしているのかが分からなくなるからだ。

## ③各ご近所で取り組みれば、残る問題は少ないはず

各ご近所でこういう取り組みが行われれば、市町村内のかなりの問題が、ご近所内で対処され、残る問題は少なくなっているはずだ。

## ④問題のそれぞれに解決のヒントが見つかった！

お互いの顔が見えるから、それぞれが日頃何をしているかよく見える。8項目のすべてに解決のヒントとなりそうな住民の行動がみついている。それだけ解決策が出てきやすい。



## <第6章>

# ご近所福祉の支援は 超大型世話焼きさん の手で

# 1.ご近所主導の課題解決活動

ご近所で発生した福祉問題に対し、4つの層（圏域）はどのように力を合わせればいいのか。

## (1)トップダウンでなく…

前述の通り、現在の福祉機関はトップダウン方式だ。第1層で、福祉ニーズを推測し、サービスをつくり、人材を集め、組織を作り、取り組みを指示する。そして第4層にいる要援護者がサービスを受けに来ることを期待する。

この方式の最大の欠点は、当事者からあまりにも遠い所を拠点にしている点で、ニーズが把握しづらいのは当然だ。

## (2)ボトムアップでもなく…

代替策はボトムアップということになる。当事者のいるご近所を拠点に、当事者のニーズに対応する。対応しきれない部分は上層へ上げて、解決を肩代わりしてもらおう。

しかし大事なことが抜けている。難問は専門機関の対応に任せざるを得ないが、かといってそのまま上層へ持って行っていいものか。すでにご近所で関わっている部分もあるので、それを大事にする必要がある。

## (3)「ご近所から手放さない」第3のやり方

ではどうしたらいいのか。問題へのご近所の関与を継続する。難問には関係機関がご近所まで足を運ぶ。問題を上層へ持っていかない。あくまでご近所での解決の道を探る。できる限りご近所の資源で解決できるようにする。

## (4)ご近所「結集」の原則

福祉問題はご近所で発生するのだから、関係機関は、まずはご近所へ足を運ぶべきである。

- ①**精神障害**の人にはご近所の元保健師が相談に乗っていた。そこを保健センターのご近所拠点と考えるのだ。
- ②**災害時に避難支援**するのもご近所在住の人を活用する。
- ③**サロンの立ち上げや充実策**として、関係機関が体操等のメニューを提供するが、これもお出かけ型（ご近所へ足を運ぶ）で足りる。
- ④**移送サービス**も、人材は基本のご近所から調達し、事故対策などの面で相談に乗るだけでいい。
- ⑤**お惣菜を作って提供**する企画では、ご近所の食生活改善推進員が中心になり、技術面などで関係者がご近所へ出向いて関与すればいい。
- ⑥**避難支援の対象を特定するためのケア会議**も、ご近所で開かねばならない。ご近所の人たちが避難支援に関わるのだから。

## (5)ご近所「解決」の原則

ご近所で解決する方がいい理由はいろいろある。ご近所で発生した問題の解決策の中には大抵、ご近所の資源を活用するということが入っている。

- ①**認知症の母親を娘が介護しているケース**。母親が以前踊りの師匠をやっていたことを生かし、教え子達に「先生、踊りを教えて!」とこの家へ押しかけてもらうのだ。
- ②**虚弱で引きこもりの男性が車で買い物にも行けないという話**。彼のために、途中の休憩所として自宅を開放している人がいた。車に乗せてくれてもいるらしい。この人を中心に移送サービスチームを作ろうという案。これもまた、ご近所内の資源を活用する方法だ。
- ③**一日ご近所をふらふら歩いて、通る人に声をかけている男性**。結局、これから立ち上げるサロンに受け入れてあげようということになった。周囲から「迷惑」と見られる男性への対応も、このご近所だから可能になった。

## (6)ご近所「調達」の原則

これまで紹介してきた事例では、「ご近所調達」と言えるのは、大部分が人材であった。ここで、「物」に関するご近所調達の事例を紹介しよう。

44世帯のご近所町内会。民生委員と町内会長が連携して、1年で取り組んだことは次頁の通りだ。特徴を挙げると、

(1)この事例では、活動に必要な人材や場所、物の大部分をご近所内から調達している。**ご近所内の資源調達にこだわることで、結果として助け合いの仕掛けにつながる**のだ。

(2)また、ご近所内からなら調達しやすいこともわかる。同じご近所の住人という意識があるから、協力を得やすい。

(3)上層の関係機関に働きかけるのも、ご近所の関係者を通せば有利になる。

これを見ていくと、**小さな50世帯の地区内に、意外なほど豊富な人材が住んでいる**ことがわかる。

①カーブミラーの設置で、ご近所内の警察関係者に協力をお願いした。

②防災倉庫の設置は、ご近所の敷地を使わせてもらい、土地家屋調査士に届け出書類の作成を依頼したし、ご近所在住の元大工に設置作業を依頼。

③「いきいき百歳体操」では、ご近所に在住の一人暮らし高齢者宅を会場に使わせてもらった、といった具合である。

### ①カーブミラーの設置

■事故の多い交差点を確認。その通り沿いに子どもが住んでおり、カーブミラー購入を決定

■町内の警察勤務の人に協力を依頼。設置許可の手続きと設置

### ②防災倉庫の設置

■防災活動を進めるうえで、防災倉庫が必要となった。

■町民の敷地を使用させてもらえるよう依頼

■市への届け出書類の作成を、町内会員の土地家屋調査士に依頼

■町内会員の元大工に、防災倉庫の設置作業を依頼

### ③「いきいき体操」の町内での実施

■町内にいきいき体操の会場がなく、地区外へ行ける人のみが参加していた

■町内会員で一人暮らしの高齢者に、自宅を体操の会場として開放してもら

### ④どぶ掃除

■高齢者が多く、側溝の蓋を上げてのどぶ掃除は負担が大きいとの声が出た

■町内会長がスポーツ団体の役員で、会員の高校生、大学生に掃除の協力を依頼

## 2.ご近所福祉の支援役も世話焼きさん

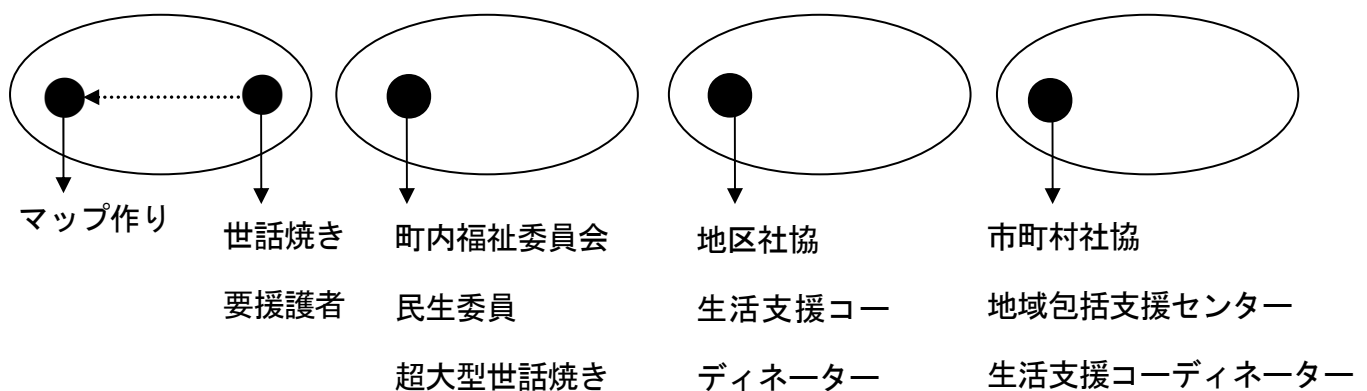
マップ作りが終わり、取り組み課題が見つかって、ご近所福祉活動が始まる。

**ご近所福祉活動の支援役もまた、世話焼きさんである必要がある。**主に超大型世話焼きさんだ。

支援者の候補は以下の通りだが、この中の誰が支援役になるかは、この中のどこに世話焼きさんがいるかで決まる。

**①町内福祉委員会**がご近所をバックアップするのが理に叶っているが、世話焼きさんがいなければ機能しない。特にこの場合、町内会の事業としてやってしまう傾向がある。

**②民生委員**も同様で、ご近所活動は民生委員の領分だと思っている人が少ない。



**③町内が50世帯の場合**、町内会長もいるし、民生委員もいるだろう。こうなると、世話焼きさんを中心にご近所福祉という大前提が崩れてしまう。たまたま町内会長や民生委員が世話焼きさんなら問題はないのだが。

**④地区社会福祉協議会**がバックアップ役になる場合の問題点は、担当者が日常のご近所まで足を運んでいない可能性が高く、その場合、ご近所のことをよ

く知らないまま支援することになるということで、よく検討する必要がある。ただ、地区社協のスタッフに超大型世話焼きさんが混じっている可能性もある。

**⑤市町村社会福祉協議会**が支援役になる場合、数百もあるご近所をどうやって支援するかが大問題である。とって、第3層の民生委員や町内福祉委員会、あるいは地区社協を通して支援するとなると、やはり直接関わるのとはだいぶ異なり、なかなか必要な所に手が届きにくい。社協のスタッフが増強されればいいのだが、それが不可能となれば、例えばマップ作りにだけは参加するといった方法もやむを得ないのではないか。

**⑥**そこで一つ期待されるのは、例えば**生活支援コーディネーター**や**地域福祉コーディネーター**、**地域包括支援センター**、**ケアマネジャー**など、多様な人材がご近所に関わりを持っている。彼らが一致してご近所活動の支援に参加すれば、支援の層も厚くなる。彼らがご近所支援でうまく連携できるかがカギとなる。

### 3.ご近所福祉の支援者の要件

ご近所福祉活動を支援する人に求められる要件とは？

- ①地域で当事者の個別支援の経験がある
- ②地域課題の解決行動の経験がある
- ③行動力（問題解決力）がある
- ④「ご近所福祉」の重要性を認識している
- ⑤世話焼きさんの力量を評価できる
- ⑥ご近所流のやり方を理解している
- ⑦ご近所へいつでも出かける態勢にある
- ⑧支え合いマップを作れる

## ①地域で当事者の個別支援の経験がある

マップ作りといっても、基本は「気になる人」をどう支援するかということだから、個別支援の経験のある人は有利になる。そういう経験がないと、「気になる人」を探して関わるということ自体、実感がわかないかもしれない。

## ②地域課題の解決行動の経験がある

マップを作った後、出てきた問題を実際に解決しなければならないが、これまでイベントを開いたり、講座を開いたりした経験しかない人は、そういう問題に対する関心が低い傾向にある。

## ③行動力（問題解決力）がある

世話焼きさんたちが問題の解決に奮闘するのを支援するには、こちらもそれだけの行動力が求められる。

## ④「ご近所福祉」の重要性を認識

ご近所福祉への理解がないと、一般的な地域活動をやっているのと同じ感覚になってしまう。第3層以上の方は、この点を特に認識する必要がある。上層の関係者では、地域が圏域でできていることさえ意識されていない場合も。

## ⑤世話焼きさんの力量を評価できる

世話焼きさんと言われている人が、必ずしもその能力のある人とは限らない。それぞれの人の資質や力量をきちんと評価する必要がある。

## ⑥ご近所流のやり方を理解している

ご近所流（住民流）については、ご近所福祉の冊子をお読みいただきたい。これを理解せずに関係者流を通そうとすれば、住民に受け入れられない。



## ⑦ご近所へいつでも出かける態勢にある

これが一番大切だ。いつもご近所に出かけているぐらいでないと、ご近所感覚を失ってしまう。「ご近所感覚」とは、後述の「ご近所密着度」と言える。

## ⑧支え合いマップを作れる

支え合いマップを作れることが、支援者の重要な要件になる。世話焼きさんたちとマップを作り、取り組み課題を提示できるということだ。

# 4.「ご近所」が分かるか？

## ーあなたのご近所密着度を測る

福祉関係者は「ご近所」という圏域があることを認識していない。また、その存在を言葉で教えられても感覚的に理解することはできないし、それではご近所福祉を推進することはできない。まずは自分の「ご近所密着」度を測ってみたいだろうか。

- ①向こう三軒とは日常的にあいさつし合う
- ②旅行に行くとき隣人たちに土産を買ってくる
- ③隣人とは互いに家に入り合う関係だ
- ④ご近所さんとは自宅開放でお茶会を開く
- ⑤緊急の困り事があれば隣家に駆け込む
- ⑥サロンや趣味活動はご近所で開くのが好き
- ⑦すぐにサービスに委ねず、ご近所さんに頼る
- ⑧町内の仲間とはご近所に戻って助け合う
- ⑨近隣の人とは家族ぐるみで交流している
- ⑩ご近所福祉を進めるグループを作っている

## 5.仕掛人(コーディネーター)の要件

地域で助け合いや福祉活動をする場合、コーディネーター役がいなければならぬ。人を動かすこと、つまり自分が「やる」のではなく、人に「やらせる」ことが得意な人だ。「仕掛屋」とも言う。

これは天性の資質という部分も大きく、誰でもできるものではない。福祉推進員や民生委員、生活支援コーディネーターなども、この資質が必要だ。

- ① 日常的にご近所へ出かけて、人と接触する
- ② 人の資質や能力を見分けられる
- ③ 人を上手に動かすのに向いている
- ④ どんな「難しい人」ともうまくやっていける
- ⑤ 人の好き嫌いがなく、誰にも好かれる
- ⑥ 様々な分野に、幅広い人脈を持っている
- ⑦ 自治区、校区、市町村に人脈がある
- ⑧ 課題を各分野、圏域に割り振る力量がある
- ⑨ 反発し合っている同士でも結びつけられる
- ⑩ 専門家とも、臆せず話せるし、要求も出せる

## 6.市町村に数百もあるご近所をどうやって支援するのか？

いざご近所福祉を進めるとなれば、大変な仕事が待っている。3万世帯の市では、50世帯のご近所が600個あることになる。そのすべてのご近所で

**マップを作り、世話焼きさんたちでご近所福祉を進めてもらわねばならない。支援者は600個のご近所を支援する**のである。

それをやるのか、やらないのか、決断をしなければならない。やるとなれば、本気で取り組み、実現するという決意が必要だ。**2~3のご近所でマップ作りをして終わりというのでは、意味がない。**むしろいいかげんに実施されたという印象を残してしまう。

では、市町村内に数百もあるご近所の福祉をどうやって支援するのか。

- ①ご近所福祉を自分たちで実行できる、自立した推進グループに育てる。
- ②超大型世話焼きさんには、複数のご近所を担当してもらう。
- ③仕掛け人の資質のある民生委員にも複数のご近所を担当してもらう。
- ④50世帯の町内会があれば、人材がそろっているから、（特に支援が必要な時以外は）自分たちで推進してもらう。
- ⑤ケアマネや包括センターが入っているご近所は、そうした機関に連携して（チームで）ご近所支援をしてもらう。
- ⑥社会福祉協議会がモデル的に関わるご近所があってもいい（5～10ご近所程度）。
- ⑦ご近所によっては、保健師や精神保健ワーカー等に活躍してもらう場合もある。そのご近所は彼らに任せる。

- ⑧ N P O やボランティアが入っているご近所では、それらの人材にご近所支援役を担ってもらう。要援護者への個別対応でなく、ご近所福祉推進という視点で関わるよう依頼する。
- ⑨ 「部分マップ」(ご近所の一部だけマップを作る)の場合は、他のご近所支援者に掛け持ちしてもらう。
- ⑩ 民生委員の地区組織が、グループでご近所福祉支援をすることができる。N P O もグループでの支援が可能だ。
- ⑪ ご近所支援の専門研修を開催し、ご近所支援の候補を掘り起こす。

## <最終章>

# 「マップでご近所福祉」 これだけで十分では？

それぞれのご近所の人たちが、自分のご近所内の問題に主体的に取り組んでいく—ご近所福祉というのは、これ自体で立派な地域福祉の営みなのだと分かってきた。もし数百あるご近所でしっかりご近所福祉を実践することができれば、もうそれだけで地域福祉は十分行われると見るべきなのだ。それに確信が得られないとしたら、再度34ページを見直してみていただきたい。たった一つのご近所で、これだけのことができているではないか。

しかし今の地域福祉は、住民によるご近所福祉活動の支援という重要な課題が放置されたまま、国から提示された事業(補助金事業)に偏って実施されている。たしかに居場所づくりやサロンを開催すれば、「見える事業」だから満足できるし、補助金を出す側からも評価される。しかし一方で、自分たちの自主事業が見つからずに焦っているという声も聞こえてくる。

# 1.ご近所福祉の存在を認められない？

## (1)問題を見つけたらすぐに持って行ってしまふ

ご近所に近づいてきた保健福祉のワーカーも、問題を見つけると、それを持って上層へ行ってしまふ。これは地域包括センターも、民生委員も、社会福祉協議会も同じだ。

## (2)ご近所さんに一言、とはならない

その際、そのご近所の人たちに一言相談や挨拶をしなければ、とは思っていないだろう。ご近所の福祉を進める主役は住民だとは考えられていないからだ。

## (3)ご近所さんも関わっているのを知らない？

ここでの問題点は、関わりの対象者(要援護者)に、ご近所さんがある程度関わっているということを、ほとんど知らないことである。もし知っていれば、その対象者に関わってくれている人に一言声をかけるぐらいはするはずだ。

## (4)「ご近所さんには知らせないように」

こういう話がある。ある一人暮らしの女性宅に、近くの女性が毎日のように訪れ、なにくれとなく面倒を見てくれていた。その後、その一人暮らしの女性に認知症の症状が出てきたので、急遽ケア会議が開かれた。そこでの申し合わせ事項の1つが、「毎日面倒を見に来てくれるあの人には、彼女が認知症になったことは知らせないようにしよう」ということだというのだ。噂話を広められては叶わないということらしいが、一般住民が要援護者に関わることへの根強い不信感が伺われる。

## (5)関係者が「声をかける」べき相手を育てよう

といっても、今のところ、ご近所福祉は主に世話焼きさんたちが自発的に取り

組んでいるだけだから、「一声かけるべき相手はご近所内の誰か」と問われると困ってしまうだろう。

本誌で詳細に紹介した事例の場合は、ご近所内の5名の世話焼きさんが、本格的に関わろうとしているし、それを社会福祉協議会がバックアップする体制も作っている。とにかく早急にご近所福祉の推進体制と支援体制を作っていかなければならない。その上で、**ご近所福祉というものを、一つの独立、自立した営みとして評価し、支援していく必要**があるのだ。

## 2.当事者から見れば、スモール・イズ・ビューティフル

ご近所でのマップ作りやご近所福祉の重要性が、なかなか福祉関係者に理解されないのは、第1層で行われている事業こそが本格的な福祉であるという意識があるからではないか。

しかし、第1層で行われている事業が、当事者から見て、本当に求められている福祉だと言えるのだろうか。

当事者一人ひとりからすれば、スケールの大きな事業だとか、大きなシステムで動いている事業であるといったことは、あまり関係がない。むしろ、**ご近所という小さな圏域に資源が集められ、いろいろな人が日常的に自分に関わってくれる、まさにスモール福祉こそが、「行動半径が極めて小さい」という特殊事情を抱えた要援護の当事者が何よりも求めるもの**なのだ。

## 3.住民に関係者流の助け合いを押し付けない

最近、国も「助け合い」を強く推進するようになったが、介護保険が行き詰っ

たからといったことではなく、そもそも福祉の基本は住民の助け合いなのである。

ところが、これを急ぐあまり、国は、住民に助け合いを「させる」ことを始めた。住民を集め、いくつかの事業の選択肢を示し、補助金をあげるからやりなさい、と。その結果、どんなことが起きているか。推進者から出てくる悩みと言えば、「なかなか人材が集まらない」「毎度おなじみの顔ぶれ」そして「彼等にはやらされ感がある」。

どうして福祉関係者は、住民を自分たちのやり方で動かそうとするのか。住民は助け合いという営みをしていないから、我々が活動を促すより仕方がない、と思っているのではないか。

しかし、住民は何もしていないわけではない。マップ作りをすれば分かってくると言っても、そのマップ作りに近づこうとしない。それでいて、住民がやっていることなど些細なことだと決めつけてしまう。

スモール福祉は、スモールだから価値が薄いのではない。当事者が望んでいるような活動をしているからスモールなのであって、スケールの大きい事業が価値が高いのではない。

## 4.生活支援コーディネーターはなぜご近所福祉に興味を持たないのか？

ひとつ疑問に感じるのは、生活支援コーディネーターの動きである。彼等もまた「見える事業」をめざして、居場所づくりなどに邁進している。マップ作りやご近所福祉を提案しても、なかなか興味を持ってもらえない。

だが、生活支援とは、なにも居場所づくりだけではない。繰り返しになるが、34ページの事例を見れば、ご近所ごとに多種多様な生活支援のテーマがあることがわかる。ご近所ごとの生活支援のテーマを、ご近所さんと一緒に進めていけ



ば、立派な生活支援になるのだ。

しかもこれらの大部分は、他のご近所でも適用できる。とすれば、ご近所でマップ作りをするたびに、いくつかの「一般化」できる取り組み課題が出てくるから、それらを他のご近所にも広げて活用していけば、素晴らしい生活支援事業になるではないか。これらのノウハウと情報を、地域内の生活支援コーディネーターで共有していけばいい。

福祉をもっと住民や当事者の目で見えていけば、ご近所の重要性が理解していただけるとは思われる。

---

## 住民流福祉総合研究所

木原孝久

〒350-0451

埼玉県入間郡毛呂山町毛呂本郷1476-1

TEL049-294-8284

kiharas@msh.biglobe.ne.jp

<http://juminryu.web.fc2.com/>

---